

中日理論言語学研究会第40回記念大会
 国際フォーラム2015「言語における形式と意味の対称-非対称性」
 (2015年1月11日, 同志社大学室町キャンパス寒梅館2階)

2チャンク仮説からみる 対称性と非対称性

定延利之
sadanobu@kobe-u.ac.jp
 (神戸大学)

謝辞

- お招きくださった中日理論言語学研究会の皆さま, 特に沈力先生・星英仁先生にお礼申し上げます。
- 本発表は, 日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究((A)23242023, 研究代表者: 定延利之)の成果を含んでいます。

本発表の概要

- 「言語における意味と形式のマッチ(対称)とミスマッチ(非対称)」は, 発表者の長年の研究テーマの一つ。
- 発表者はマッチとミスマッチをともに説明するために, 「2チャンク仮説」(定延2000)を提案している。
- 本発表ではこの仮説の概略を紹介し, この仮説を使って, さらに幅広い様々なマッチとミスマッチを説明する可能性を検討する。

マッチとミスマッチ

- マッチとミスマッチは, 分布(つまりことばが現れる位置)に関するものと, 分節(つまりことばの内部構造)に関するものに2分できる。
- まず, 分布マッチと分布ミスマッチを, 「並列標識」を例にとって紹介する。
- 続いて, 発表者の「2チャンク仮説」を紹介し, この仮説で分布マッチと分布ミスマッチがどのように説明されるのかを示す。
- さらに, 分節マッチと分節ミスマッチの様々なタイプを挙げ, これらが「2チャンク仮説」でどのように説明され得るのかを検討する。

並列標識は全ての名詞に付いて当たり前(マッチ)

- 一郎とか 二郎とか 三郎とか 四郎とか
- 一郎にしても 二郎にしても 三郎にしても 四郎にしても
- 一郎やら 二郎やら 三郎やら 四郎やら
- 一郎と 二郎と 三郎と 四郎と
- 一郎も 二郎も 三郎も 四郎も
- ke一郎 ke二郎 ke三郎 ke四郎
- et一郎 et二郎 et三郎 et四郎

疑問1: 最後の名詞にだけ付かないのは? (ミスマッチ)

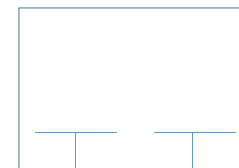
- 一郎と 二郎と 三郎と 四郎
- 一郎に 二郎に 三郎に 四郎
- 一郎や 二郎や 三郎や 四郎

疑問2: 最後の名詞にだけ付くのは? (ミスマッチ)

- 一郎 二郎 三郎 and 四郎
- 一郎 二郎 三郎 oggi 四郎
- 一郎、 二郎、 三郎、 和 四郎
- 一郎 二郎 三郎 四郎 que

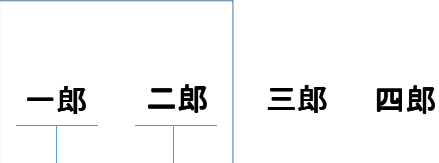
2チャンク仮説(定延2000)

音韻情報の処理領域は容量が2チャンクである。
(2脚のイスのある待合室) (Miller 1953)

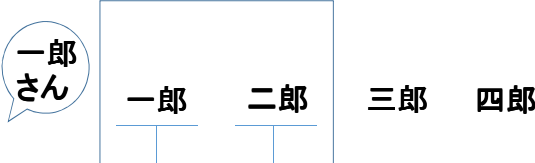


容量限界まで要素を入れてから処理を始めると

処理領域には「いま処理する要素と、次の要素」の2要素が入る。これで処理開始。

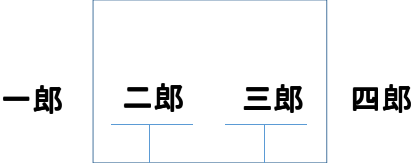


まずは第1要素を処理

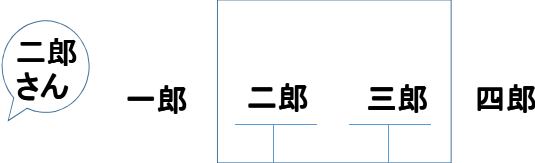


ここで処理領域が変化

処理済みの第1要素が処理領域から排除され、第3要素が領域内に。やはり「いま処理する要素と、次の要素」の2要素。

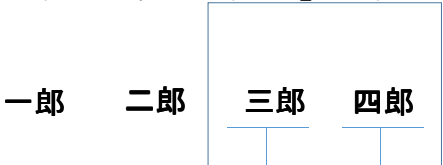


続いて第2要素を処理

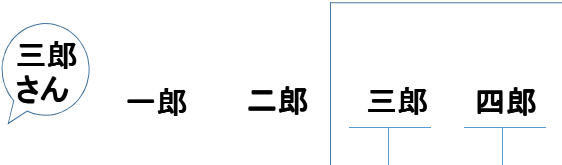


再び処理領域が変化

処理済みの第2要素が処理領域から排除され、第4要素が領域内に。やはり「いま処理する要素と、次の要素」の2要素。

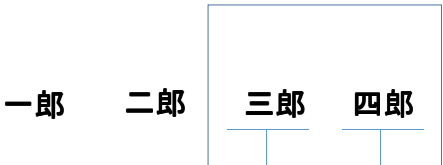


続いて第3要素を処理



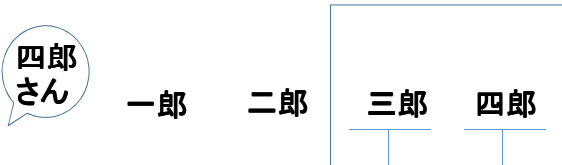
ここで処理領域は変化しない

第4要素が最終要素であるため。



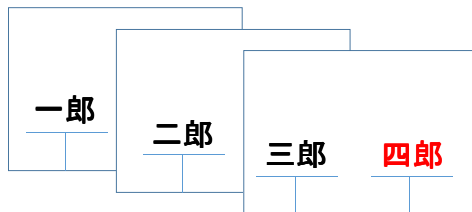
最後に第4要素を処理

処理領域はこれまでと違い、「さっきの要素といま処理する要素」に。



2チャンク仮説による音韻情報処理の特徴1

最終要素だけは「作業領域内の新しい要素(右側)」として処理される。



疑問1: 最後の名詞にだけ付かない並列標識は?

- 一郎と 二郎と 三郎と 四郎
- 一郎に 二郎に 三郎に 四郎
- 一郎や 二郎や 三郎や 四郎

解答:「いま処理領域内の古い要素を処理中」とことば。

疑問2: 最後の名詞にだけ付く並列標識は?

- 一郎 二郎 三郎 and 四郎
- 一郎 二郎 三郎 oggi 四郎
- 一郎, 二郎, 三郎, 和 四郎
- 一郎 二郎 三郎 四郎 que

解答:「いま処理領域内の新しい要素を処理中」とことば。

なお、全ての名詞に付く並列標識(マッチ)は、「いま処理領域内の要素を処理中」とことば。

複数要素から成る語基に付く前倚辞の アクセント指定力の及ぶ範囲1

- 全域に及べば分節マッチ
 - 全域に及ばなければ分節ミスマッチ
- 例: [これ以上xうまくx書き]よう
[テラスからx見えにくくxなり]がち
[バ리를x旅行]中
[大好きなx芸能人]見たさ

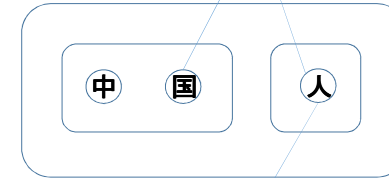
複数要素から成る語基に付く前倚辞の アクセント指定力の及ぶ範囲2

反例に見えるもの(3チャンク?)は実はサポート

- 意味が希薄な「もの」「人」「奴」「こと」「者」絡みの例: [こわいもの
○見]たさ・[新しいもの○好き]・[からいもの]好み・[うまいもの]尽く
し・[申し込んだ○人]勝ち・[できた○奴]順・[あぶない○こと]好き・[弱い
○者]いじめ
- 意味がまとまる場合の例: [背の○高い○もの順]

合成語におけるアクセント合成1: 後部要素が1フットの場合

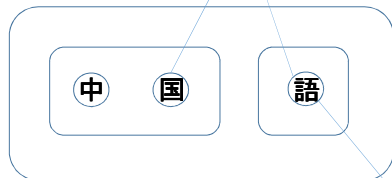
要素の境界に位置するフットでは「合成的」という情報が見える



最終フットでは「全体で語」という情報が見える
処理領域が[中 国]から[国 人]に変わった段階で「合成
語」という情報が見えるので、「国」にアクセント核を付与する。

合成語におけるアクセント合成1: 後部要素が1フットの場合(続)

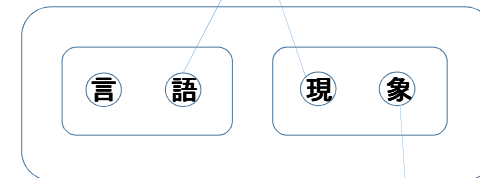
要素の境界に位置するフットでは「合成的」という情報が見える



特殊な最終フットで、「全体で語」という情報が見えない
処理領域が[中 国]から[国 人]に変わっても「合成語」とい
う情報が見えないので、アクセント核は付与されない。

合成語におけるアクセント合成2: 後部要素が2フットの場合

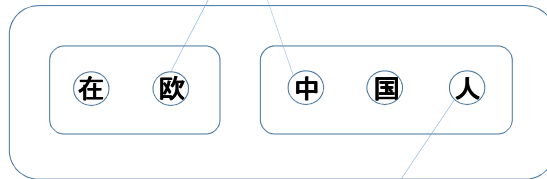
要素の境界に位置するフットでは「合成的」という情報が見える



最終フットでは「全体で語」という情報が見える
処理領域が[語 現]から[現 象]に変わった段階で「合成
語」という情報が見えるので、「現」にアクセント核を付与する。

合成語におけるアクセント合成3: 後部要素が3フット以長の場合

要素の境界に位置するフットでは「合成的」という情報が見える

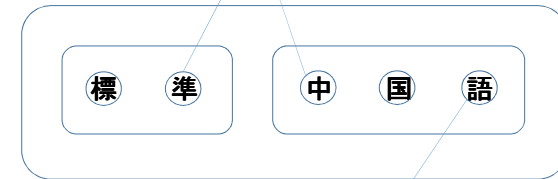


最終フットでは「全体で語」という情報が見える

処理領域が変わっても「合成語」という情報が見えないので、アクセント合成は失敗する。後部要素の核(「国」)が残る。

合成語におけるアクセント合成3: 後部要素が3フット以長の場合(続)

要素の境界に位置するフットでは「合成的」という情報が見える

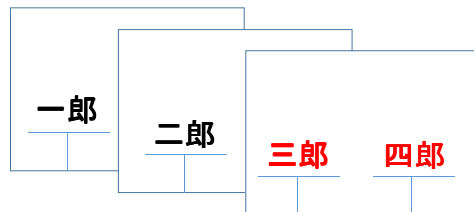


特殊な最終フットで、「全体で語」という情報が見えない

処理領域が変わっても「合成語」という情報が見えないので、アクセント合成は失敗する。後部要素の核もない。

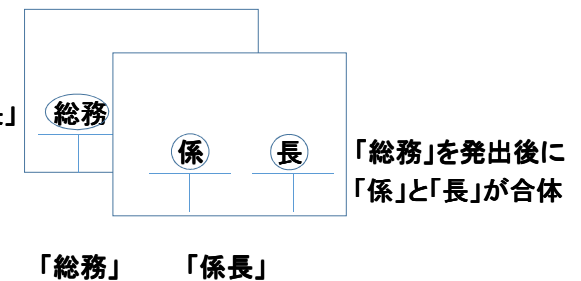
2チャンク仮説による音韻情報処理の特徴2

最終要素とその直前要素だけは共通の作業領域で処理される。2要素がまとまって語彙化されれば.....



接ぎ木語(定延2001, 定延・黄2004)

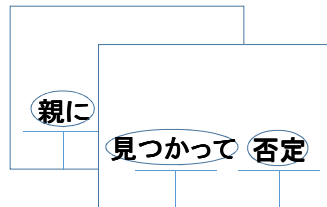
元々は「総務 係長」



「総務」を発出後に
「係」と「長」が合体

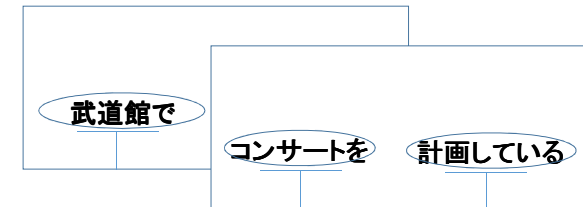
「総務」 「係長」

「親に隠れて」?



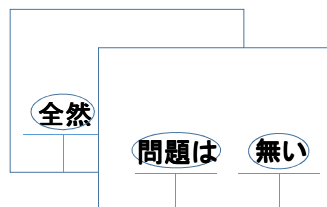
「親に」 「隠れて」

「武道館でコンサートを計画している」?



「武道館で」 「コンサートを」 「計画している」

「全然大丈夫」?



「全然」 「大丈夫」

度数表現＋意外の「も」(澤田1991, 定延1995)

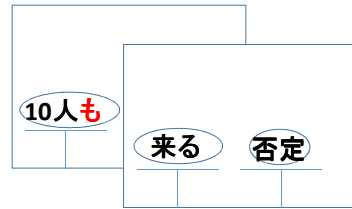
「肯定文では意外な大数量, 否定文では意外な小数量」が原則。

例: 10人も来ない

- 「欠席者は多くて7, 8人と思っていたら甘かった。何と__」
10人という大人数が, 欠席という肯定的なデキゴトを起こした
- 「出席者は最低でも15人と思っていたら甘かった。何と__。7人だ」
10人という少人数さえ, 出席という肯定的なデキゴトを起こさなかった
原則から外れる解釈あり。
- 「え, 10人も来たの?」いや, さすがに__けどね」

原則から外れる解釈:「10人も来ない」?

「10人も」は肯定文で
大人数として解釈



「10人も」 「来ない」

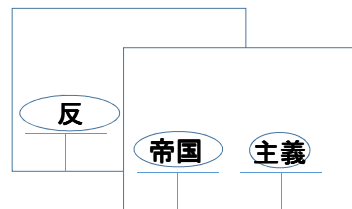
「反帝国主義」の3義

「反帝国主義」に3義あり

- 帝国に反対する主義(例:彼は帝国のやることには何でも反対する。まさに反帝国主義の権化だ)
- 帝国主義に反対(例:彼は反帝国主義の立場を生涯貫いた)
- 帝国主義に反対する主義(例:帝国主義と反帝国主義)
↑第3義は「反帝国主義主義」のはず

「反帝国主義」の3義(続)

元々は第2義で
反 [帝国 主義]



「反」 「帝国」 「主義」

最後に「主義」と言うことで主義らしくなる

文献

- Gardner, Howard. 1985. The mind's new science: a history of the cognitive revolution. New York: Basic Books. [ハワード・ガードナー(著), 佐伯胖・海保博之(監訳), 無藤隆他(訳)『認知革命: 知の科学の誕生と展開』東京: 産業図書.]
- Miller, George A. 1956. "The magical number seven, plus or minus two: Some limits on our capacity for processing information". *Psychological Review* 63 (2): 81-97.
- 定延利之 1995 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡隆志・沼田善子・野田尚史(編)『日本語の主題と取り立て』227-260, 東京: くろしお出版.
- 定延利之 2000 『認知言語論』東京: 大修館書店.
- 定延利之 2001 「出来事としての語: 接ぎ木語の動的構造をめぐって」音声文法研究会(編)『文法と音声 III』, 83-105, 東京: くろしお出版.
- 定延利之・黄麗華 2004 「日漢「量合詞」的対比研究」<現代中国語研究>編輯委員会(編)『現代中国語研究』, 第6期, 15-21.
- 定延利之 2012 「述語の格体制からみた構造と意味の対応とズレ」シンポジウム「文構造はどこまで意味を表しているのか」日本語学会第145回大会(2012年11月25日, 於九州大学箱崎キャンパス)『日本語学会第145回大会予稿集』, 16-21.
- 澤田(山中)美恵子 1991 「「も」の含意について再考: 数量詞+「も」を中心に」『KANSAI LINGUISTIC SOCIETY 11』, 21-30.